第43回　広島YMCAインターナショナルユースピースセミナー
参加報告書

2024年8月4日～8月8日

横浜YMCA

<実施概要>

　2024年8月4日（日）から8日（木）までの5日間、第43回広島YMCAインターナショナルユースピースセミナー（以後、ピースセミナー）が広島YMCAおよび広島市平和記念公園を中心に開催された。国内外から引率含め約40名のユースが集い、被ばく者による証言、平和記念資料館の見学や平和祈念式典への参列、広島YMCA国際ユースリーダーが企画した平和ワークショップなどを通じて、思いを語り合い、多くの価値観に触れ、お互いに認め合うことや平和の大切さを学んだ。国際ユースリーダー達が考えた今回のテーマは、**「絆 -Let's connect the baton of hope with "TOMODACHI"　"ともだち"と希望のバトンをつなげよう」**。初めて出会い「ともだち」になった仲間と、平和とはなにかを考え、これからの未来を明るく照らす光となってほしいという気持ちが込められている。
また、今回のピースセミナーではメインのグループワークとして「**世界YMCA Vision2030 ワークショップ**」が行われた。
「世界YMCA Vision2030」を構成する①Community Wellbeing（コミュニティー ウェルビーイング）② Meaningful Work（やりがいのある仕事と雇用環境の創造）③ Sustainable Planet（持続可能な地球のために） ④Just World（公正な世界の実現のために）の4つのグループに分かれて、それぞれの問題点や解決策について自由に発表を行った。
以下、各日程で行われたプログラムの報告である。

第1日目　8月4日（日）

　広島YMCA3号館2階多目的ホールにて12時より受付開始。13時の開会式に向けて国内外の参加者が集合し、各自昼食を済ませた。参加者は名札とTシャツ、3日目の自己肯定感ワークショップで使用するための折り紙を受け取った。

◆開会式・開会礼拝

広島YMCAの国際ユースリーダーが日本語・英語で司会を担当した。ピースセミナーの概要の説明後、リーダーの紹介、参加YMCAの紹介、個人申込みの参加者の紹介が行われた。その後、開会礼拝にて、日本福音ルーテル広島教会の立野泰博牧師より「Never Forget から先に行こう！」というメッセージをいただいた。参加者全員で讃美歌「ONE VOICE」を歌い、礼拝を終えた。礼拝後、広島YMCA家守治司総主事より歓迎のご挨拶をいただいた。

◆被ばく者証言

今回、小倉桂子（おぐら　けいこ）さんに被ばく者証言をいただいた。小倉さんは、8歳（小学2年生）の時、爆心地から2.4キロ離れた牛田町で被ばくされた。昭和56年、平和のためのヒロシマ通訳者グループを設立し、海外からの作家、メディア、平和運動家などの通訳として多くの作品に関わり、ニュールンベルグの反核模擬法廷、ニューヨークの世界核被害者会議などで英語による被ばく者体験の証言を行っている。

「私が印象に残っているのが「Hiroshima is a place where you listen to the others（広島は、他者の話に耳を傾ける場所）」という言葉です。小倉さんが小学2年生のときに原爆が投下されました。原爆のあと、熱傷で苦しむ人が「水をくれ」と小倉さんに声をかけて、水を飲ませたらその人は息絶えてしまったそうです。重症の人間には水を与えてはいけないということをまだ子どもだった小倉さんは知らなかったので、「この人を殺したのは私なのではないか」と終戦後もずっと苦しんだそうです。そのほかにも焼けただれた体で幽霊のように水を求めてさまよう人々や、毎日死体を焼くために市内に行く父親の姿を見送り、被ばく者への差別にも苦しみながら幼少期を過ごされました。戦後60年ちかく、被ばく体験について口を閉ざしていた小倉さんは、平和記念資料館の館長をされていた旦那さんの急死を機に使命を引き継ぐという形で体験を語る活動を始められたそうです。スピーチをされていたときはとても堂々として、「この方が戦時中の生まれなのか」と驚いたのですが、スピーチが終わった後に話しかけると、本当に小柄で、優しいおばあちゃんという感じでした。原爆の地獄のような光景を思い出すことは、辛いことだと思います。忘れてしまいたい記憶もたくさんあると仰っていました。それでもこうして私たちのような戦争を経験していない世代に自分の言葉で語ってくださることが貴重でありがたいことだと思いました。」（M・S）

◆フィールドスタディー　慰霊碑・記念碑めぐり　平和記念資料館見学

　グループに分かれて、国際ユースリーダーの引率のもと平和記念公園内の慰霊碑巡りと平和記念資料館の見学を行った。

　「グループで平和記念公園を散策し、原爆ドームや原爆の子の像などを見学した後、資料館で原爆に関する資料や絵を観覧した。昔は被ばくし、皮膚が焼けただれた人々を再現した蝋人形の展示があったが、今回は撤去されて観ることはできなかった。観覧客が多く、制限時間内に展示物を全て観ることはできなかった為、主に高い位置に展示されていた写真や絵画を中心に見学した。写真は白黒のものであったが、もしカラー写真であったら蝋人形のように展示が困難になるほど、白黒の画像は目を背けたくなるものばかりだった。展示されていた遺物などを見ることができなくてもおぞましいものだった。」(M・N)

第2日目　8月5日（月）

◆アイスブレイク

　2日目は、緊張をほぐし、参加者同士の相互理解を深めるため２つのアイスブレイクが実施された。「バースデイライン」では、声を出さずにジェスチャーで自分の誕生日を伝え、全員が誕生日の早い順に並んだ。指や手を使って数字を表す方法は国によって異なるが、相手が伝えたいことを汲み取ろうと真剣に取り組んだ。続いて6-7人のチームに分かれ、「新聞紙タワー」に取り組んだ。新聞紙とセロハンテープを使い、制限時間内により高い新聞紙タワーを作れるように競った。倒れそうになっても、みんなと協力して一つのタワーを作り上げたことで大きな達成感を感じられた。

◆コンセンサスゲーム

　コンセンサスゲームでは、「チームの同意をつくる」ことをゲームを通して学んだ。「①自分が乗っている宇宙船が不時着してしまったとき、生き延びるための優先順位は？」「②平和を作るために必要なことは？」の質問に各自優先順位をつけて、グループの結論を出した。このゲームにはユースだけでなくスタッフも参加した。まったく話がまとまらず、こんなにも各自考えていることが違うのかと驚きがあった。多数決は禁止されていて、同意を得るために話し合うこと、意見を聞くことが重要視された。

◆フィールドスタディーの振り返り

　1日目に平和記念公園で実施したフィールドスタディーの振り返りを行った。共に見学を行ったグループで集まり、感想を共有した。建物や展示物を見て感じたことを各自が付箋へ記入し、1枚の用紙にまとめた。用紙は「悲しい」「苦しい」「恐ろしい」「むずかしい」などと書かれた付箋であっという間に埋め尽くされた。原爆による被害の実態や、歴史について考えたことを整理しアウトプットすることで、学びを深めた。

◆グループワーク　「なぜ戦争はいけないのか」

　フィールドスタディーのグループとは別のグループにわかれ、「なぜ戦争はいけないのか」というテーマで話し合いを行った。話し合いは、ワールドカフェ方式を用いて3つのセクション（①グループごと ②全員が他のグループへ移動 ③もとのグループへ戻る）でおこなわれた。話し合いのメンバーが途中で入れ替わることで、多くの人の考えや価値観に触れることができ、参加者たちは新たな気付きを得ることができた。

◆「世界YMCA Vision2030」ワークショップ①話し合い

　4つのグループ①Community Wellbeing（コミュニティー ウェルビーイング）② Meaningful Work（やりがいのある仕事と雇用環境の創造）③ Sustainable Planet（持続可能な地球のために） ④Just World（公正な世界の実現のために）に分かれ、それぞれのテーマにおける問題点や解決策について話し合いを進めた。現状においてワールドワイドな社会問題を、解決することは難しいことではあるが、国内外から集ったユースがどうしたら解決に導けるかということを議論することに大きな意義がある。難しいテーマであるが、最後の発表に向けて各グループ話し合いを進めた。

「私が所属していたグループのテーマは「Just World」、つまり「公正な世界の実現のために」という問題について発表することでした。ほぼ初対面の人もいるし、一番大きなワークショップということもあるので、私は意見を出す前に、まずはメンバー全員の自己紹介を提案しました。皆さん快く受け止め、自己紹介してくれました。全員の名前と大体の性格を把握することができました。グループのメンバーは7人で、ほかのグループと違って、私のグループには今回のプログラムのリーダーがいない状態のため、メンバー全員の力だけでがんばることになりました。意見を言い出し始めると、まずは定義に着目しました。「公正」の定義はやや抽象的なので「不公正なことについて考えてもいいのではないか」ということになり、みんなそれぞれが思う「不公正」の問題とその現象を整理して、いくつかをまとめました。その中に比較的に表現しやすい「貧困問題」「人種差別問題」「ジェンダー差別問題」「武器の有無問題」と「障がい者差別問題」の五つを絞り出しました。
　あるメンバーの提案で、私たちのグループはロールプレイの形で発表することにしました。その提案に他のメンバーたちは不安を感じましたが、挑戦意欲も感じられました。また別のメンバーが「1つのロールプレイの後、その問題についての意見や解決方法をまとめる」という分かりやすいやり方を提案しました。このように、1日目の成果は、発表方法とその内容を決めることでした。スケジュールを確認した上、6日の時間はロールプレイの台本作りやまとめ内容の作業とリハーサル、7日は発表前の最終調整をすることにしました。」（Q・K）

第3日目　8月6日（火）

◆平和祈念式典 参列

　8月6日の朝を迎え、全員で朝5時半に宿舎を出発した。6時頃に平和記念公園に到着し、祈念式典のゲートで待機した。開門後、参列席へ移動し、広島YMCAのスタッフより朝食を受け取った。8時より式典が開始された。会場は厳かな雰囲気に包まれ、松井市長の平和宣言、子ども代表による平和への誓い、岸田内閣総理大臣のスピーチなどが行われた。暑い中であったが、8月6日に広島で式典に参加し、雰囲気や臨場感を味わうことは一生における貴重な経験ができたと感じる。式典終了後、「原爆の子の像」へ移動し千羽鶴の献納を行った。

熊本YMCA

横浜YMCA

大阪YMCA

東京YMCA

NYC（上海）

台南YMCA

広島YMCA

個人申し込み

◆平和の灯ろう流しに参加

　広島には「安芸門徒」特有の、お盆に色とりどりの灯とうを飾る「盆灯ろう」の風習があり、それと精霊流しの風習が合体したのが現在の灯ろう流しのルーツだと言われている。原爆で親族を亡くした方にとって、毎年8月6日に灯ろうを流すことが供養であると考えられていた。2005年、広島の「サダコの折鶴」の話を知ったヨーロッパのアルメニアの子ども達から、広島の灯ろう流しで平和のメッセージを流してほしいという要望が広島市に届いた。広島YMCAは広島市から相談を受け、「広島YMCA平和の灯ろう流し」プログラムが始まった。広島YMCAのパートナーシップのYMCAにも呼びかけ、多くの国から平和のメッセージが届いている。今年で20周年を迎えるイベントで、ピースセミナー参加者も一緒に参加した。

　「世界中のYMCAから送られてきた子どもたちによる平和のメッセージや絵を、ランタンに作り替えました。さらに、参加者も平和への願いをこめて折り鶴を作り、作成したランタンにのせました。折り紙をするのは初めてだという海外からの参加者に、英語で作り方を説明しながら、一緒に作りました。繊細な工程を英語で説明するのは大変でしたが、完成後の達成感に満ちた顔や、感謝を伝えられた時とても心が温まりました。作成後は平和公園へ移動しました。ろうそくへ点火し、平和への祈りを捧げランタンを元安川へ流しました。式典から始まり貴重な経験をすることができた1日でした。」(K・M)

◆自己肯定感ワークショップ

　ありのままの自分を肯定する感覚「自己肯定感」を上げることを目的としたワークショップがおこなわれた。このワークショップでは、参加者が1日目の受付時に受け取った折り紙と、同じ色の折り紙を持つメンバーを観察し、メンバーの良いところを全員の前で1人ずつ発表した。

「自分が気づくことができていない自分のいいところを知ることで、自己肯定感が上がった。自分を客観視することで人間関係などでかかわり方を見直すこともできた。」
（M・N）

◆「世界YMCA Vision2030」ワークショップ②発表準備

　前日の話し合いに引き続き、各グループが発表に向けて準備を行った。

　「この日は計画通りに台本作りとまとめ内容の作業が完成しました。メンバーの中には最初は「芝居をやりたくない」という人もいましたが、みんなの励ましで、自分のできる範囲で挑戦してみることになりました。手先がとても器用なメンバーがロールプレイの小道具を全部作ってくれました！」(Q・K)

◆「世界YMCA Vision2030」ワークショップ③発表

4つのグループが、それぞれのテーマの課題や問題解決に向けて話し合ったことについて発表を行った。発表の形式は自由であるため、ポスターを用いるグループ、歌や手話を披露するグループ、寸劇をしながら発表するグループなどがあった。

「この日は発表準備の時間を利用し、微調整しながらリハーサルをしました。ある子が監督役として、グループ全体をコントロールしてくれました。その時、グループの一人がやや緊張気味でした。私は彼女に「頑張らなきゃという気持ちじゃなくて、楽しくやりましょうという感じでやればいい」と話しかけてみました。彼女の表情が少し楽になった気がしました。芝居をやりたくないという発言があったメンバーは、まとめの内容の解説役に自ら挑戦することにしました。何より感動的だったのは、そのメンバーが「すらすら言えるように、少し暗記した方がいいと思います」と言いながら、黙々と覚えるように努力していたことです。このように、みんなの力で、無事に発表することができました。私もワークショップへの感想の時間を借りて、グループメンバーのいいところをみんなの前でほめました。本当にやりがいがあるグループワークでした。」(Q・K)

◆宮島観光

　参加者全員でフェリーに乗り、宮島を訪れた。世界遺産である「厳島神社」の大鳥居の前で集合写真を撮影後、自由に散策をした。参拝や食べ歩き、お土産を買うなどして、セミナーで出会った仲間と観光を楽しみながら交流した。

◆フェアウェルパーティー

　ピースセミナーの最後の夜は、広島YMCA3号館2階多目的ホールでフェアウェルパーティーが行われた。パーティーの料理は、広島ワイズメンズクラブのご家族の方に用意していただき、ブッフェ形式で各自料理を盛り付け、参加者同士の交流を楽しんだ。余興として木原世宥子先生が率いるダンスチームのよさこいパフォーマンスを鑑賞した。パフォーマンス後、よさこいの体験を行った。しゃもじを持って参加者全員で楽しく踊った。

「フェアウェルパーティーはとても楽しくて、感動的でした。この場を作ってくれたリーダーたち、スタッフたち全員に感謝の気持ちでいっぱいでした。
私は初めて「ザ・日本式の感動作り」を実感しました。4日間という短い時間の中で、皆さんに新しい友達ができたとともに、少しだけでも新しい自分に出会うことができました。その場の笑顔と涙が絆の証、青春の証だと思いました。
　記念カードをリーダーから渡された時、その場を借りて、参加者全員に向けて一言話しました。私は一応年上の身として、このプログラムに参加した若者たちに、「こんな大人もいるよ」という感じで、「長い人生でいろんなことに挑戦してみて、楽しくやりましょう」と応援しました。」(Q・K)

◆各YMCA紹介

　フェアウェルパーティーでは、各YMCAの紹介を行った。

「横浜YMCAの発表では、横浜Yにはどのような事業があって、各自YMCAとどのように関わっているか、ECGL（中高生英語キャンプ）、YMCAこどもにほんごクラブ、ウクライナ支援などの取り組みも紹介しました。大阪YMCAは漫才でYMCA紹介をしたり、上海や台湾の参加者は都市の説明、歴史的な背景なども伝えていて各Yの特色がよく表れていました。」(M・S)

参加者による感想

Q・K

始まる前は、このような平和祈願プログラムとは思えませんでした。私の子ども時代からの教育では、平和はいつも「戦争の残酷」と「民族の屈辱」につながっていました。ですから、平和を手に入れることが大変で、常に厳粛なイメージでした。しかし、今回の平和祈願は、戦争時代の部分もありましたが、日常にあふれているピースなイメージの方が強く感じられました。過去のことは忘れてはいけないが、この記憶は恨みを育むためではなく、同じことが二度と発生しないようにすることが目的だと思います。これを実現するために、人と人との間で理解し合い、小さな「絆」が生み出される。その一つ一つの絆の繋がりが平和への辿り路だという考え方もあり得ることだと思います。この感想は、まさにリーター達が考えた主旨「身近な平和にも気づき、その気づいた幸せや喜びはやがて大きな自信となり、希望となるはずです。私たちが希望を仲間へ共有することは平和を創造する第1歩だと考えます」と同じことです。私もこれからこの平和の「バトン」を次の人に渡すように頑張ります。

もう一つの感想は個人的なことですが、偶然なことに、Vision2030グループワークのメンバーの中の一人がちょうど私の大学の後輩でした。最終日の夜、同じく上海出身の彼女と話しながら、グループワークのことを顧みました。彼女によりますと、一緒に「人種差別問題」のロールプレイをしていたとき、グループのメンバーの一人が彼女に優しく接してくれて、たくさん話かけてくれたそうです。それだけでなく、その子はいつも同じグループのメンバーの大人しい子を気にかけてくれていました。グループワークが始まったばかりのとき、彼女はその大人しい子に嫌われているのかと思っていたのですが、グループワークが進むにつれてその大人しい子も少しずつ変わっていって、最終的に笑顔で彼女とハイタッチしました。「自分のことが嫌いで話をしないのではなく、ただ人と話すのが苦手なだけ」と彼女はこの事実を理解しました。そして、ワークショップの一番重要なのは高得点の結果ではなく、みんな全員が参加できることだと気付いたことです。これも私たちが中国で受けた「エリート教育」ではなかなか体験できないことでした。その夜、こんな一体感のあるグループワークを初めて経験した彼女は感動を抑えられなくて、泣き続けていました。この涙も彼女の成長の証だと、私は思いました。

M・N

　私が小学校中学年の頃、戦争について探究する授業がありました。参考資料として使用を許可されていた図書館の本を使って皆で戦争について調べました。 戦争の遺物や遺体などの写真が掲載された本を使いましたが、皆開いてすぐ、閉じて放っておいてしまいました。学ぶ気がないのではなく、あまりに衝撃的な内容であったからです。戦争についての図鑑はきれいなままです。
　そのような見るのもおぞましいものは見たくないものですが、私たちが生きる現実から目を背けることはできません。自主的にこのようなセミナーに参加することは大きな意義のあることであったと思います。平和について考えを深めることや、様々なバックグラウンドを持つ互いとの協調はセミナーの言うまでもない目的ではありますが、自分個人の手綱を握って自分の中での世の中への考えをも深められました。
　原爆の被害の調査は正確性が高く、詳細に残されていますが、戦後そのような力があまりなかった日本に全てできるはずもなく、アメリカが新兵器の威力調査の為に行ったと思うと実験の道具となってしまった広島と長崎は残念でありません。今回平和記念資料館を訪れましたが、観覧客が多くあまり展示物を見ることは叶いませんでした。ですが世界中の様々な国から来た人々がおり、また館内にあるベンチや至る所で自身の子どもに向かって真剣な表情で何かを語りかける人々を多く目撃したことが印象的でした。

　宿舎で行われた平和や社会問題に関する活動では、新聞紙タワーの製作から、平和を達成するために必要な要素を話し合うことまで多岐にわたるものでした。ほとんどの参加者とは初対面で、グループで行われる活動は楽ではありませんでした。ですが、グループメンバーを観察、会話を重ねるとグループで創るものは何がより良いのかはっきりしてきました。それぞれの得意なことや知識を生かした発表は興味深いものでした。
　「平和」という概念がいかに抽象的であるかという事が一つのジレンマとして残っています。「健康」や「平和」などのトピックは日常的なものですが明確な答えを定義してしまうと、また多くの人々の中でのとらえ方の相違点が明らかになり衝突が生まれ、「平和」や「健康」ではない状況が生まれてしまうでしょう。
　今回のセミナーで得た新しい視点や経験を、これから心に留めて国際情勢や人間関係を眺望し、関わっていきたいです。

M・S

今回、Change Agentとして、広島YMCAインターナショナルユースピースセミナー2024に参加させていただきました。全体を通して考えていたことが、「人はどのように他者の経験や感情に共感し、さらにそれを共有することができるか」です。

日本は敗戦国で、原爆のこともちろん歴史の授業で習いましたが、学生時代の私は事実として認識していたのみで、被ばく者やその家族について、想像力が及んでいませんでした。今回はじめて広島に行ったのですが、駅を降りたときの印象は発展した街というイメージでした。しかし、街を歩いていると、ところどころ被ばくした建物、木などが点在し、広島という街の歴史的な重みを感じました。平和記念資料館では、近代的な構成になっていて、映像や被ばくした現物の展示、手紙、写真など様ざまな観点から戦争の悲惨さを訴えかけてきました。私が特に注目したのが核兵器の開発とその使用を決定する公的文書の展示でした。アメリカは広島と長崎に2種類の原子爆弾を落とし、かなり統計学的に、どのくらいの被害が想定され、どのような後遺症が残るかを日本で効果・検証していたことがショックでした。非戦闘員である民間人を大量に虐殺することは、人道的な責任があることの上に、戦時国際法に違反しています。戦争という混沌の中で、日本も多大な惨禍を残し、その面を無視することはできません。そして科学は人々の生活をより豊かにするために存在するはずであったのに、人類の叡智が大量虐殺に使われてしまったことを私たちはよく考えないといけません。

そして、YMCAのスタッフとしても学ぶことが多くありました。ピースセミナーはユースが主導するプログラムということで、リーダーが司会やプログラムの構成、全体へのアナウンスなどを担っていました。海外からの参加者もいる中で、40人前後の団体をリードすることはとても大変なことです。広島の夏はかなり暑く、野外で行われるプログラムも多かったため、熱中症などの体調不良にも終始気を配らないといけません。リーダー達は日本語のアナウンス、英語のアナウンスの役割分担をはじめタイムマネジメントなど、プレッシャーがある中、日々成長していました。参加者も、初日は緊張して何も話せなかった子や、グループワークで何をすればよいか分からず立ち止まっていた子もいましたが、徐々に仲間と打ち解けて、「いまの自分ができることをする」「困っている子がいたらサポートする」という認識がグループ間で共有されていき、グループ発表ではよいチームワークを見ることができました。大人だったら、「この人はこういう性格だから仕方ない」「できる人にやらせよう」となっていたかもしれません。でもユースはたった5日間でも毎日変わっていくんだということを実感しました。

以前、アメリカのドラマを観ていた時に「Nagasaki」という単語が、動詞として「破壊する」という文脈で使われていて驚いた経験があります。もちろん一般的に普及しているスラングではないようですが、「アメリカ人にとって広島や長崎はそんな対象なの？」と心がざわついたのを覚えています。私たちの世代は戦争を経験した世代が祖父母の代で、年々その数は減っていきます。私たちは本当に他者の経験に共感することができるのでしょうか。世代、人種や言葉の壁を超えて、痛みを分かち合うことはできるのでしょうか。広島ピースセミナーはユースに対して答えを提供するのではなく、「問う」ことに意義があると感じました。

K・M

　今回は、参加者引率として広島YMCAインターナショナルユースピースセミナーに参加しました。国内だけでなく海外からの参加者、引率含め約40人が集いました。
4泊5日間、自宅を離れ、暑い中毎日さまざまなプログラムをこなす必要があるため、心や体へ負担がかからないか心配でしたが、横浜から参加した２名の参加者、スタッフともに体調を崩すことなくプログラムを終えることができました。

　このイベントは、広島YMCAの国際ユースリーダーが企画・プログラムの運営をしています。日本語と英語を用いて、状況を判断しながら臨機応変に進行するユースリーダーの姿に感銘を受けました。広島YMCAのスタッフは、ユースリーダー達に「考えさせ続けること」「リーダーたちが決めたことを尊重」「まずはやってみせること」が大切だと述べていました。専門学校でも、学生たちが企画してプログラムを実施することがあるので、学生たちが主体性をもって取り組めるよう、見守る姿勢を大切にしようと思います。

　5日間、様々なプログラムがありましたが一番印象に残ったのは、「世界YMCA Vision2030ワークショップ」の発表です。「世界YMCA Vision2030ワークショップ」では、行動目標の「4つの柱」の中で自分が一番興味関心があるものを事前アンケートで回答し、4つのグループに分かれ話し合い、その問題点に対する解決策を考え、グループ全員で自由に発表をします。題材が難しく、言語の壁にぶつかりながらも協力してどのグループも発表をやりきっていました。手話、紙芝居、寸劇など、さまざまな方法で発表をし、短時間で作りあげたとは思えない完成度で驚きました。
人前で話すことが苦手であったり、自分の英語に自信がない、という参加者が、自分の殻を破り、仲間とチャレンジし成長していく姿を間近で見ることができ、心をうたれました。
ユース参加者の毎日成長する姿を見られたことは、今回参加して一番大きな収穫であったと感じています。

　また、広島を訪れるのは初めてでした。広島平和記念資料館では、教科書などで一度は目にしたことがある被ばくした三輪車や弁当箱、焼け焦げた衣服や、爆風でつぶれた瓶を目の前にし、言葉を失いました。いくら実物を見ても、戦時中の状況を想像することは難しく、相当おぞましいことが起こっていたのだと改めて感じました。原爆投下によって、本当に多くの方が犠牲となり、残された人々にもたくさんの苦しみがありました。核兵器の恐ろしさや、残酷さを目の当たりにして、よりいっそうこのようなことが二度と起こらない、起こさせない社会をつくらなければいけないと感じました。まずは、同じような認識を多くの人がもつことが必要だと思います。専門学校では、毎年7月に学童と合同で折り鶴交流会を実施しています。その際、平和の重要性について、学生と子どもたちが一緒になって考えられるようなプログラムとして取り組んでいこうと思います。

　皆さまのご協力のもと、引率することができました。このような機会をいただき感謝申し上げます。